

## 宮古の植物方言名について

川上 勲 (宮古島市文化財保護審議委員)

### はじめに

平成元年度(1989年)から4年間伊良部高校に勤務した。当時生物Ⅱの授業の一環として学園祭に因んで何かまとめようと話し、生徒に自分が住んでいる地域の植物方言を調べさせることにした。生物Ⅱはやや専門性のある教科で生徒は幾つかの科目のプールから選ぶことになっている。基礎的な生物Ⅰとは違い応用など、やや詳しく扱っていい科目である。毎年数人の生徒が集まり、教師と生徒とが深くコミュニケーションしながら教えることができる。

生徒は両親や隣の人たちから植物の方言名を聞き、同時にその植物体を取ってくる。学校に持ってきたらそれに和名を筆者が記入していくという仕組みである。調べたものは第3回学園祭に「伊良部町の植物方言集(平成3年11月23日)」の小冊子として発行した。これには筆者が既に集めたほかの地域のもの等もページを異にして記した。

今回のものは、その後調べられ、冊子に載ってなくその後収集できた分、あるいは今まで人々のとらえ方の説明や解説が十分でなかったもの等の中から、幾つかを書いてみた。また、幾つかについては、関連して宮古におけるその植物の生態や特徴も加えた。

始めは「宮古の自然'08」のタイトル名で複数の項目について予定していたが、この話だけでも紙幅は満たされるとして内容を示すタイトルにした。

なお、できるだけ平易な文で、中高生の生徒でも分かるよう心がけ、語句や用語で難しいものはその場で説明したり、かっこ内に注釈を付け加えたりし、簡単に理解できることを心がけた。

### I テリミノイヌホウズキ

1) タリカスナータ(宮古)、タリカスミー(平良):タリカスは泡盛を醸造した(酒をタリルという)後にでる濃厚なスープ状液体である。特有な臭いと色がある。ほかにタリカスギー(平良、久松、佐良浜、シマコバンノキ)がある。シマコバンノキは以前薪(まき)用として里内の生け垣、畦に植えられた。夕方になると木全体が臭うがその臭いがタリカスに似ていると見立てて名がついている。ここでは色に注目している。色は濃緑色を表している。しかし、実際のタリカスの色は薄紫色であると記憶している。果実をつぶしたとき中身が出てくる。緑色の種子が果実の色と相まってタリカスの色(濃緑色)に見えることからその名がついた。ミーは「実」である。ナータは「木の実全体」の方言名。「タリカス色した実をつける草」の意味。サシバの若鳥にもタリカスミー(伊良部島、平良、久松)と同名がついている。若鳥は胸全体に黒褐色の細長いたて縞模様があるのですぐ分かるが、眼の白目に当たる所が濃い緑色をしているのでそういう方言名がついている。

2) ビキフウズキギー(平良):ビキは雄の意味。フウズキギーは直接にはホウズキのこと。

フズキギーは別種のセンナリホウズキを指す方言名。すなわち、「センナリホウズキのオスの木」の意味。

3) ナズィダギー (旧下地町)：ナズィは直接には「果実」のこと。「ダ」は強調を表すことば。ここでは「よく実をつけている草」の意味。黒い実を多くつけ、それが目立つことによる。

4) ポーポーギー (久松)：ポーは意味は不明だが久松では黒い実を付けているものには良くついている。例えば、クロイゲ (ポー)、イヌビワ (ポーヌナズィ、又は「の」、ナズィは「木の実」の意味)。果実の有毒性を利用して、すりつぶして皮膚に付け皮膚病をなおす (久松)

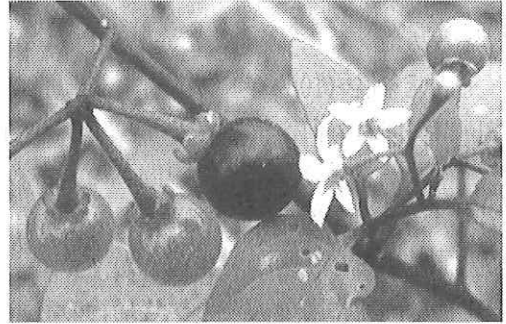


写真 テリミノイヌホウズキ

テリミノイヌホウズキはナス科の植物で、空き地や畑地に自生する雑草である。丈は高いのは80 cmほどで雑草の中では高くなる方である。好窒素性で肥沃な土地を好む。施肥期の丈の低いサトウキビ畑や野菜収穫後の畑地に繁茂する強害草である。宮古には戦後帰化している。はっきりした記憶ではないが1960年頃はなかったように思う。夏には径3～5 mmほどの光沢のある濃紺の果実を多く付ける。花は小型で真っ白だがやや青みのある花卉のもの(ムラサキイヌホウズキと呼ばれ別種)も混ざっている。果実は見かけによらず有毒で食べられない。似たものにイヌホウズキがあるが、数個の果柄(かへい・果実が付いている棒状のもの)は一点から出ないで果軸に不揃いにつくことが異なる。

## II タブノキ

1) コウーギー (平良)、カオキ (大神)、コーギ (伊良部)、カウギー (佐良浜)：コウーは「香」の字が当てられる。コウーは宮古では線香の方言名。コウーギーは「線香をつくる木」の意味。平良以外のカオ、コー、カウも同じ線香を意味する方言名である。各地域で線香をつくるのに利用していることを示している。宮古で昔からつくられている線香は黒く平たいもの(宮古香くミャークコー)と呼ばれる)で、「大和香」に比べて余り香りは強くない。過去に成川集落で工場を見た。聞いたところ、線香をつくる時は、デンプンのり、タブ葉粉(タブの葉を乾燥させ粉にする)、木炭粉、松の木の腐植粉(リュウキュウマツの木を腐植させ粉にしたもの)を混ぜ合わせ、ねり固め乾燥させる。タブノキにはクスノキ科特有の臭いがあり松と合わせて香料として利用している。また葉には粘りけがあるので固める材料のひとつとしても利用する。タブノキの葉は漆喰(しっくい、方言でムツ)を製造するときワラ切れとともに入れて突く。やはり粘りけを漆喰に持たすために利用する。

2) シバキ (多良間)、タウ (多良間)：意味は不明。タウはタブが変化したもの。

3) ティムヌギー (佐良浜)：ティムヌは薪(まき)のこと。「薪にする木」の意味。宮古全域では薪のことをタムヌという。ティムヌはタムヌが地域で発音しやすいように音韻変化した

もの。音韻変化は方言名が伝わるときはよく見られる現象である。タムヌは3度の料理にどうしても必要で水とともに各家庭ではその確保に苦労していた。ほんとうはタブノキのみならず、燃えるものは何でもティムヌ（まき）である。タブノキは確かにティムヌの一つであるが、ティムヌはタブノキとは限らない。

戦後しばらく（昭和30年代）までは、宮古地区の燃料は自然の草木や作物の収穫殻（から）の植物体で、総してタムヌと呼ばれていた。昭和50年代にはプロパンガスが普及した。筆者が小学生の時既に役割があり、ミズフン（久松、水くみ）とタムヌシー（久松、薪取りに行くこと）でどちらもきつい仕事であった。タムヌは枯れて燃える植物なら何でもさして草や木にこだわらない。しかし、火持ちがいいので木は、「キダムヌ」（久松、平良、キは木、ダムヌはタムヌ（薪）が変化したもの）と呼ばれ喜ばれた。「スプズィガラ」（久松、「サトウキビの絞りカス」のこと。スプィズは絞る、ガラは「殻」を当てるが、「中身を取った後に残ったもの」とか「目的を得た後のもの」とかの意味がある）や「パーガラ」（久松、平良、パーは葉「サトウキビの収穫時に取り払う葉」のこと）も重要な燃料で、家屋の一部に濡れないような場所が設けられて保管され、毎日必要なだけ取り出して使った。今はプロパンガスが普及し水道が当たり前になっているので、これらを確保するのに使う時間の分だけでも、昔とくらべて子供達は自由で、生活の質は向上しているといっている。



写真 タブノキ新芽（2月）

### Ⅲ シロノセンダングサ

1) ムツフサ（平良）、ムツフサギー（平良）、ムッタズィフサ（）（方言名に続く「（）」は宮古全域か、宮古のどこかの地域だが特定できないことの何れかを示す。以下も同じ）：ムツはくつつくや付着の意味。フサは「草」、ギーは「木」に当てるが、草や木どちらの意味にも使われる。ムツフサ、ムツフサギー、ムッタズィフサはいずれも「付着する草」、又は「ひつつく草」の意味で種子が衣服や動物の毛に容易に付着することから方言名がついた。

2) ツンタバイウサギー（佐良浜）：ツンは着物、タバイは付着、ウサは草、ギーは草や木の総称。したがって意味は、「着物に付着する草」の意味。黒い種子が着物の裾によく付着してくることから名が付いた。

3) サンテフサギー（伊良部、平良）、シズィフサ（久松）：意味は不明

4) マズムヌヌパズィ（多良間）：マズムヌは「化け物」、「幽霊」の意味。パズィは「針」。種子が針に似ているが人の世の針ではない。きっと、あの世で幽霊が使う針に違いないと見立てて名が付いた。

5) ケイビイン（佐良浜）：ケイビインはそのまま「警備員」である。それがどうしてケイビ

インの方言名をもらったのかなかなか面白い。平成3年の秋、前述したように生徒から植物の方言名を集めていた。その時、「ケイビイン」という珍しい方言名があった。大体次のような会話をしたと思う。「ケイビインってあの警備員?」、「何でこんなしゃれた名がついたの」、「それは先生には言えない」、「男だから」。どうも性に関することらしい。

こう言われるとますます「ケイビイン」の由来が知りたい。いろいろ話しているうちに若い娘を持つ母親が思わず付けた名だと分かった。佐良浜の方言で「インバイ」というのがある。意味は今でいう「不倫」である。しかし、不倫の関係でなくても、若い男女の不健全な遊びにもあてる。特に、星空の下でのものを「ヤマイン」という。ヤマは山でなく野原という意味である。インはインバイのインである。漁村は一般に貞操を守る文化が強い。海難で後家さんになっても、貞操を守ることを美徳とする習慣が定着している。人々は男好きの女に対しては「ヒーウイ女」と後ろ指をさし厳しい目で見るともあてる。

若い娘を持つある母親は気掛かりでならない。娘がヤマインしているらしい。母親には娘が未婚の母になる心配が捨てきれない。しかし、娘は指摘されても否定している。母親と娘はいつも穏やかならぬ会話で終わる。とうとうある日の会話で、母親はいった。「嘘をついても駄目だよ」。

「私には警備員が知らせてくれる」、「警備員?」、「そうだ」といって娘の衣服に付いているシロノセンダングサの、黒く小さい種子を指し示したということである。その後、母親と娘の会話がどう進んだかは分からない。確かにこれが生えている所を歩かないと種子はつかない。警備員は怪しいことがあったらすぐに雇い主に知らせてくれる。まさに警備員の役目を果たしているわけである。穏やかならぬ会話で思わず言った「ケイビイン」は方言名誕生となり、その後シロノセンダングサを指すようになったというのである。

シロノセンダングサは沖縄本島での記録は1964年ごろ、米軍の陸軍病院（嘉手納町の町中に入る手前）の門の近くのもので初めてである。琉球大学生物学科の植物関係の先生たちが初めて記録している。筆者も1965年当時大学に入った年の夏、例年恒例の国頭村与那で行われる宿泊実習のため1号線（現国道58号線）をバスで移動中、バスの中が急に騒がしくなり、みんなで窓から白い花のかたまりを指さしていた。その時一緒に見た。そこにはフェンスに沿って2メートルくらいの範囲で今まで見たことのない白さの花の集団があった。これが沖縄での初株である。その後、南と北に同じ早さで人に付着しながら分布を広げていった。本種は、観光地のような、人の集まるところに神出鬼没をしながら広がっていった。那覇までたどり着いたのと北の端、辺戸岬までとはそんなに差はなかったと思われる。

宮古での初記録は1972年で1965年から7年後である。筆者が前年まで勤めていた中学校の、生徒や先生たちの応援のために中学校陸上競技大会にいった時のことで、最初の株と思われる



写真 シロノセンダングサ（耕地への侵入）

ものをみた。平良市総合陸上競技場(旧名)の西の入り口交通安全の門の右側(道側から入り口に向かって)の柱の本である。道をはさんで、耕地(今は整備されない駐車場になっていてメドハギやチガヤ群落がある)には、既に道路に沿って少し白いのが点在していた(シロノセンダングサが広がっていた)。柱の下のもは一際大きな株として広がっていて、誰でも最初の株と分かるものであった。当時「いよいよ入ってきたか」と思った。その後翌年には佐和田アパート(当時)の斜め向かいのバス亭(県道78号線、通称城辺線)で見かけた。その後数年間は、幹線を車でまわりながら分布点を城辺、下地など地図の上に落としていったが、後は手に負えないようになり記録しなくなった。やはりバス亭などを渡って分布していった。

なぜ、陸上競技場だったのか。人の多く集まる所から入るのはやはり人の衣服について運ば



写真 シロノセンダングサ

れる特徴によることを示している。筆者は「那覇空港から直接応援に駆けつけた人の衣服について運ばれ、気がついた所で種子を取って捨てた」と考えている。その後間もないころ、那覇に行くとやはり、既に那覇空港(旧国内線ターミナル)の周辺にはシロノセンダングサが自生していることを確認した。宮古へは本島中部から那覇にたどり着いてすぐに渡ってきたのである。

宮古には以前から近縁種のコシロノセンダングサ(旧シロバナセンダングサ)とコセンダングサが既にあった。いずれも北米からの帰化植物だと

いう。少なくとも昭和30年代には既に宮古の畑地の雑草としてあり馬、ヤギの飼料にもしていた。筆者もフサカズイ(直接には「草刈り」と訳すが意味は「家畜の飼料採取作業」のこと)でよく取った記憶がある。以前の農業経験者は「今のムツサは前のものとは違うのではないか」とたずねてくる。コセンダングサはほとんど舌状花(キク科の花の外側の部分)を持たず管状花(キク科の花の真ん中部分)のみで白い所はなく全部が黄色い花である。(まれに小さい白い舌状花を1、2枚まばらに付ける。)そのせいで花が咲いている印象がなくいつまでもツボミのように見える。コシロノセンダングサはコセンダングサに草丈や枝振りの特徴はそっくりだが舌状花が車輪状に並ぶ。花は周りが白で真ん中が黄色である。これら2種は、見れば今のシロノセンダングサとだれでもすぐ区別できるが、現在は全く見えなくなった。他県での例として、3種は鹿児島県に分布するがここと違って冬は枯れる。(1年生草本という)。特にシロノセンダングサは鹿児島県南部の沿岸道路沿いに今(2002年ごろ)急速に増えてきているという。コセンダングサは愛媛県にもある。

この3種の区別点を見てみると筆者の観察では以下ようになる。

シロノセンダングサは大型でほかの植物に寄り添って伸びると100センチ以上になる。単独で地面に生えても膝(ひざ、丈は45センチくらい)より上で70センチくらい。そのため群落内は歩きにくい。枝は長く伸び倒れて地面から斜上する(斜めに起きあがる)。また、主茎と

枝の区別がはっきりしない。地面につくと節から根をおろす。花は大型（大きいのは2.5cm以上）で一斉に咲いていると遠くからでも白く目立つ。その様が草に積もったあわ雪を思わすので当初の名はアワユキセンダングサとついた。強害草で耕地を始め空き地、公園、海岸、道路脇（わき）、野山の山道などどこでも生え、他の草との競争にも強い。

一方のコセンダングサとコシロノセンダングサは草丈は高さ30センチくらいで高いものでも50センチ前後である。シロノセンダングサに比べたらずっと小さい。茎は直立し地面につくことはない。枝も長く伸びず茎から斜上するだけで地面につかず、主茎と枝がはっきりと区別できる。大きな群落はつくらず歩いていても歩きにくい。コシロノセンダングサは同じ白い花だが小型で1.5cm前後でシロノセンダングサの半分以下に見える。畑地の雑草で畑地以外では裸地に少し出る程度でほかの草との競争にも弱い。

#### Ⅳ ヤブニッケイ

方言名はチツザギー（平良）、ツツァギー（宮古）、ツァザギー（佐良浜）、ジッツギー（佐和田）、タツザギー（）、ヌーマピンガスギー（）、カチャカチャギー（）、ナチフサギー（）、カラカギー（）、シャームヤギー（久松）、パチパチギー（）などである。

1) 音を示す方言名の意味：ヌーマは馬、ピンガスは逃がす、ギーは木の意味。燃える時パチパチと大きな音が出るため、音に驚いて馬が逃げ出すと見立てて「馬を逃がす木」という方言名になった。以前は農耕馬が宮古全島の農家に飼われていた。カチャカチャ、カラカ、パチパチも燃えるときの音を表現したもの。ナチは泣く、フサは草で「泣く草」の意味でやはり燃えるときの音が木が泣いているようだとしている。木全体に水分が少なく生の時から容易に燃やすことができると話す。枯れると、燃えるときの音はほかの木とは違って大きいことでこれらの方言名がついた。シャームヤは風が梢（こずえ）を吹き抜ける時の音をあらわしたもの。ほかの木と違って特別に音が大きくシャーシャーと聞こえるとしている。

2) チツザギー、ツツァギー、ツァザギー、タツザギー、ジッツギー：意味は不明。それぞれはチツザギーが変化したもの。

3) フシラギー（平良）、フシイラギー（城辺）、フチャズギー（佐和田）：フシラ、フシイラ、フチャズは越冬のため渡ってくるシロハラのことである。シロハラが越冬中にヤブニッケイの黒く熟した果実を食べるということから「シロハラの木」と言う意味である。字佐和田では鳥を捕獲するためのカゴをストムと呼ぶ。ストムの中にヤブニッケイの実を入れ藪（やぶ）の中に仕掛けシロハラを捕るといふ。また、ほかの地域でも次の木の実などを使う。（）内は使っている地域例。オオムラサキシキブ（佐良浜、皆福、鏡原）、ゲッキツ（皆福）、



写真 ヤブニッケイ（12月）

クロイゲ（皆福）。時にはメジロやウグイスもかかるという。シロハラについては調べてみると、他県での越冬時は幾種類かの木の実、草の実（例：サルトリイバラ、ナナカマド、ノブドウ、クマヤナギなど）を食べている。筆者は、同じ時期に越冬するリュウキュウヒヨドリ（ミパギビジュマ（平良））がヤブニッケイの実を食べているところは観察しているが、シロハラについては気づかない。シロハラは地面で枯れ葉をかき回しているのはよく見るが、木の実も確かに食べているようである。シロハラの方言名は次のようである。フシャズ（平良、久松、上野）、フチャズ（佐和田）、フィズィ（鏡原）、フシャイラ（城辺）、フィシャズ（伊良部、佐良浜）。

宮古では藍染めの時に葉を使う。宮古群島においては御嶽林や丘陵の斜面など堆積土が少なく所々露岩のある所に自然林は成林している。乾燥しやすいところに適応しているため葉は余り水分を含まない。タブノキは現在耕作地としているような堆積土の厚い所に成林し、耕作地率が高いためタブノキ林の面積は少ない。両方は住み分けした形で宮古の自然林を形成している。

## V キダチハマグルマ

1) イスンキャウ（佐良浜）：イスは石や岩のこと。ンキャウの意味は不明。キダチハマグルマは海岸のモンパノキやテリハクサトベラに混じって普通に見られる。砂浜や隆起サンゴ礁（本当は海水の海退現象によってできた海岸の草原帯）上に見られるが、方言の生まれた地域は隆起サンゴ礁や石垣、岩塊にキダチハマグルマが自生する地域なのでイスがついた。昭和の時代の終わりごろまで、佐良浜の漁港にはカツオ節工場が数件あり鰹（かつお）漁は盛んであった。休漁期の秋から冬にかけては、「カツオのけずり節」をつくるため、奥さんたちがカツオ節工場に集まってくる。けずり節をビニール袋につめ市販するためである。専用のナイフで硬いカツオ節を削っていくが、水分を表面に吸収させて削りやすくするため、カツオ節の上にしばらくの間植物の葉を乗せておく。カツオ節が植物の蒸散による湿気を吸うまでの間、奥さんたちは井戸端会議に余念がない。その乗せておく植物がイスンキャウ（キダチハマグルマ）である。「何でこの植物なの」と聞いた。「それしかないからさ」と期待はずれの返事が返ってきた。確かに工場の周りにはこれを除けばテリハクサトベラやモンパノキぐらいだ。草で数が取れるのはイスンキャウ（キダチハマグルマ）くらいだ。本当は何でも良く、もっと水っぽい柔らかい植物がいいと話していた（例えばソクズのような）。海岸の植物は葉も厚く乾燥に対して強いため水分を余り出さない。しかし休漁期の1日は長い。たっぷり時間がかかる分、自分たちの

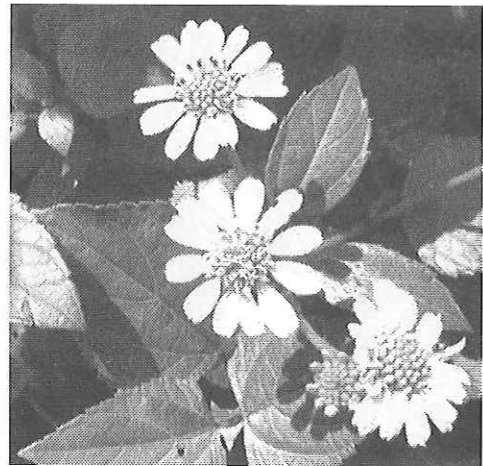


写真 キダチハマグルマの花

おしゃべりも心ゆくまでできると言うことで不満はない。

宮古では、まだ自給自足の続いていた戦後しばらくのころ、各家庭でミソをつくっていた。ミソ麴（こうじ）は、麦を炊いて後その麦で育てる（「麴を寝かす」という）。その時植物をかぶせる。その植物はソクズ（タズ、宮古全域）であり、数日間たっぷり湿気を与え続ける役目をする。以前実際に宮古ミソを家で造っていたという婦人は、「コウズをつくるのは失敗も多くデリケートなので、家のどの位置（風通しや気温の変化の度合いなどが適する場所）でコウズ（麴）を寝かすかが決まっていたし、タズ以外の植物も使わなかった」と話していた。タズは水分をたっぷり含み最適だという。また、失敗した時は、「葬式から帰ってきて、手を洗わずにコウズにさわったのではないか」といわれたという。

宮古にもミソナオシという植物はある（旧上野村の松林の中など）が、個体数が少ないせいから使う習慣に至っていない。

## Ⅵ ルリハコベ

1) ミズフサ（伊良部、久松）、イズッターバスフサ（大神島）：ミズは「水」の意味だがここでは海水のこと。「海で使う草の意味」。イズは「魚」、ターバスは「酔っぱらわす」、フサは「草」の各意味。「魚を酔っぱらわせる草」の意味。ルリハコベをつついて汁を出しそれを魚のいる岩かげの水中で振ると魚がふらついて浮いてくる。魚毒作用を使った漁の一種である。広い所では使わずタイドプール（潮だまり）のような限られた空間で使う。

ルリハコベに限らず植物にはサポニン配糖体と呼ばれる物質が広く含まれている。サポニンは石けんのように泡立つので石けんに由来する名がついた。これら泡立つ作用のある物質は界面活性剤の働きをする。その働きが魚の鰓（エラ）の粘膜の上に新しい膜をつくる。そのため、水中でのガス交換が阻害され、魚は呼吸困難でフラフラしながら浮き上がるというわけである。魚毒作用で有名なものは、沖縄本島に自生するツバキ科のイジュノキがある。樹皮の成分で同じような漁をする。筆者の考えではイユ（沖縄、「魚」）ヌキがイジュノキとなったのではと思っている。サポニンを多く含む、含まないが魚毒漁に使う使わないが決まると思われる。

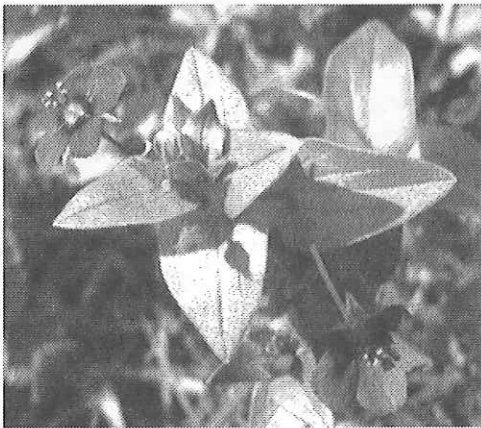


写真 ルリハコベ

ルリハコベは宮古では11月ごろから畑地の雑草として出始めルリ色（濃青色）の花を付ける。1～3月が最盛期で初夏には枯れてしまう。その植物が生えている時期だけの漁である。もう一つ、久松のKさんはミズフサには2種類あるとルリハコベ、ヤムグラを示した。Kさんは漁師でもあるが、自分は使ったことはないが話には聞いたことがある、以前に使っていたのではないかと話していた。「ミズフサというから2種とも使っていたのではないか」と話す



と、「そうかも知れない」と話していた。多分同じ使い方のため同名が付いたと思うが、確認はとれてない。さらに魚がフラフラと出てくる理由について、次のような話をしていた。「ミズフサを砕いて青い(実際は緑色)汁を出しそれを魚のいる所に流すと魚は見たこともない青い液体に驚き恐怖の余りフラフラと動きが鈍くなる。結局、簡単に柄つきの網ですくい取られる」というのである。使っている本人たちは魚毒作用については知らないものと思われる。

## Ⅶ イボタクサギ

1) インジャカ(佐良浜)、インムジャカ(佐良浜): イン、インムは海や海岸のことで、ここでは海岸を示す。ジャカ(宮古全域)はジャコウネズミのこと。ジャコウネズミは刺激を与えると特有の臭いを発する。その臭いがジャコウジカの発する臭いに似ているということから名が付いている。イボタクサギは葉をもんだりちぎったりすると悪臭がある。木を切っても同じである。その臭いがジャカ(ジャコウネズミ)に似ていると見立てて「海岸にあって臭いがジャコウネズミに似た木」の意味を持つ。

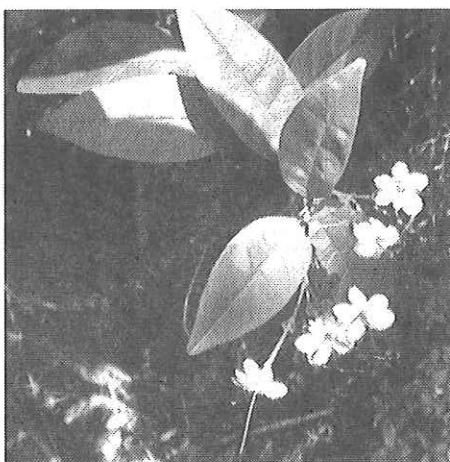


写真 イボタクサギ

2) クシャギ(多良間)、クサイキ(大神): クサイはそのままだ「臭い」の意味でいずれも「臭う木」の意味。

3) クソギ(伊良部)、コーソギ(伊良部): クソは「糞(くそ)」。コーソもクソが変化したもの。「糞の臭いのする木」の意味。

## Ⅷ センナリホウズキ

1) ハランムギー(佐良浜): ハランムは「孕(はら)んでいる」の意味で、「妊娠している草」の意味。苞(ほう)が風船のようにふくらむ形になり中に果実を包んでいるため。その風船のような果実がたくさん生る(なる。実を結ぶこと)様子が「千個も生っているようだ」とセンナリと和名はついた。

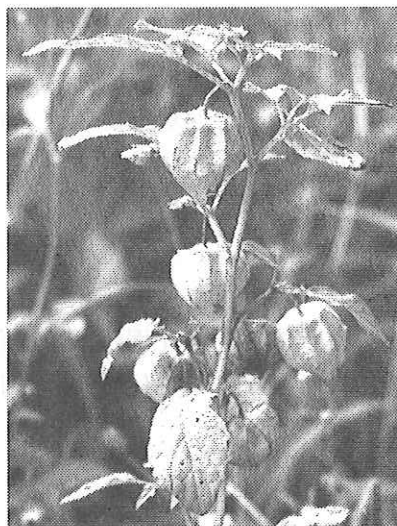


写真 センナリホウズキ(提供 佐藤)

2) フウズキギー(平良、久松、宮古): フウズキはホウズキの意味。フウズキ遊びとって、小学生以下の女兒が戦後しばらく(昭和30年代)までは、その果実を口の中にくわえ、つぶさないようにしながら舌を使い口腔内でズー、ズーと音を出して遊んでいた。

以前は畑地の雑草としてよく見られたが、近年まれになり絶滅しつつある。今は海岸や空き地などで時々見かけ

る。除草剤の使用が普及してきた事によるものである。除草剤は平成の初めごろチラホラ使われ始めた。そして今ではごく普通に農家で使われ、草取りの労力から解放している。ここ数年、近縁種のヒメセンナリホウズキが、造成地後の空き地や野菜畑などに見られるようになっている。本種の無毛に対しヒメセンナリホウズキは、全体が有毛である点と背丈が低く地面をほうようにして枝を広げることで見分けられる。

センナリホウズキは一時、便秘の民間薬としてブームとなり当時の雑貨店やスーパーでは乾燥したものを販売していた。(1979年ごろ)。使ってみた母の話では良く効くが苦くて飲みにくいという。また、強い便秘には濃く、軽い便秘には薄く煎じて飲む。濃度によって効き目が調整できると話していた。佐良浜で聞いた別の話によると、誤って妊娠した女性に煎じて飲ませ墮胎させるのに使ったという。恐らく産婦人科の医者がいなかったころの話だと思うが、そんな効き目があるのかということや使われ方にびっくりしている。下げる効果が大きいということを示しているのかもしれない。それにしても自分自身は「孕(はら)んでいる草」の名をもらい、実際はそれと反対のはたらきを持つという取り合わせが奇妙である。

## 謝辞

本稿をまとめるに当たり次の方々にご協力をいただきました。ここにお礼申し上げます。貴重な話を聞かせていただいた字松原の川満文雄・キク夫妻、方言名の確認に協力いただいた友人の内間良俊、渡眞利定一、写真の提供を頂いた植物研究家の佐藤宣子。ありがとうございました。

## 参考文献

- ・平成3年11月、選択2「生物」受講生(指導川上勲)、伊良部町の植物方言集(第3回学園祭資料)、沖縄県立伊良部高等学校
- ・1972年11月、宮農生物クラブ植物班、宮古の植物方言名調査(農文祭資料)、県立宮古農林高等学校
- ・1973年11月、宮農生物クラブ(指導川上勲)、宮古の植物方言名集(農文祭資料)、県立宮古農林高等学校
- ・1996年3月、川上勲、'宮古の自然' 95、平良市総合博物館紀要第3号、P71
- ・昭和54年6月、天野鉄夫、琉球列島植物方言集、新星図書出版、沖縄
- ・平成11年3月、松井宏光、愛媛の人里野草図鑑、愛媛新聞社、愛媛
- ・2003年11月、大工園認、野の花めぐり(秋・初冬編)、南方新社、鹿児島
- ・1964年11月、初島住彦他、琉球植物目録、沖縄生物学会、沖縄